

---

# 家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る！～改～

難波 壱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ 自由な風、来る！〜改〜

### 【Nコード】

N6945Y

### 【作者名】

難波 壱

### 【あらすじ】

『家庭教師ヒットマンREBORN！ 自由な風、来る！』の改版です。

風間南は交通事故に巻き込まれ、死んでしまった。しかし神の手違いだったため『転生』することになった！転生先は『家庭教師ヒットマンREBORN！』の世界！！面倒くさがりや&自由過ぎる性格の南はどうするか！？

南の第二の人生が幕を開ける…

Strardinariente 1 登場人物！〜1〜

カザマミナミ  
風間 南

性別 女

年齢 12

身長 165cm

体重 45kg

一人称 オレ

誕生日 9月7日

性格 自由、冷静、興味ないと全然反応を示さない、面倒事が嫌い、仲間は人一倍大事にする

髪の色 茜色

目の色 黒

髪型 ショートカットで、毛先が外側にハネている

目の形 フランと同じだが、目の下の はない

ファッション 黒、白、青、緑、赤、などの男モノ系

アクセサリー 金属（銀色のみ）、黒や白っぽい色のモノ

（シンプルなモノ）

ピアスを両耳3つ付けてる

必需品 ケータイ、財布、iPod touch、リングペンダント、小型ノートパソコン（電子辞書サイズ）

十雅<sup>トオガ</sup>（神）

性別 男

年齢 不明（本人は『3万年以上は生きてると思うんだけどなー』  
と言った）

身長 175cm位（南の予想）

体重 不明

一人称 オレ

誕生日 不明

性格 前向き、好奇心旺盛で思ったことはすぐに行く、余計なことを言うことが多い

髪の色 金と銀が混ざったような色

目の色 空色

髪型 南と同じ位のショートカットだが、天パ

ファッション ラフな服装

アクセサリー 特にない

必需品 特にない

ヤマシタ サキ  
山下 咲

性別 女

年齢 12

身長 148cm

体重 44kg

一人称 私

誕生日 12月15日

性格 明るい、誰にでも優しい、無邪気、自分では気づいていない  
が自分第一で自分勝手

髪の色 茶色

目の色 茶混じりの黒

髪型 ロング（腰あたりまでである）だが、いつもはお団子にしている

ファッション 清楚系（特に白、薄ピンク）

アクセサリー かわいいものが好き

必需品 ケータイ、ポーチ（くし、鏡など）etc

名前の由来を話しておきます。

まず、主人公の『風間南』。

『南』は男でもありそうな名前にしたかったからです。

『風間』は…。

三文字がいい、と思って、そこからは何となく…。

『十雅』は…。

『神』＝『GOD』（逆から読む）『ゴッド』（何かがあった）

『十雅』です。

何があったのかは…。

私の気まぐれでこうなりました。

そして『山下咲』。

これも何となくですね。

あるとしたら、名前順とかいなる時に後ろの方にさせたかったんです。

『や』だと南の苗字、『風間』と離れるので。

こんな理由があっただけのような名前にしました！

これからも新キャラ出す時に由来を話していこうと思います

Episode 01 むかつく神と会っ!

オレの名前は風間南。

性別…女。

なつたばかりの中学1年…とはいっても私立の小学校から中学になっただけだからあんま変わんねエかな。

今は、ズボンの制服着て、カバン持って信号待ち中。

あ？なんで女なのにズボンの制服かって？

んなモン、スカートなんて着たくねエからに決まってるんだろ！

あ、信号が青になった。

「ふう…」



オレはゆっくりと信号を渡り始める。

メンドクサイ。何もかもが。

学校行って何になる？

オレには何にもならない。

…もう、アイツはいないから……。

「…つまんねーの」

そう、呟いた時だ。

キキイイイイッッッ!!!!!!

ドカアァンッッ!!

「!!!!!?!?!?!」

オレのすぐそばでトラックと軽自動車の交通事故発生。

あ…。

オレのほつに来る!!?!?!?!?

ドッッッッッ!!!!!!

オレは見事に巻き添えをくらい、どれだけのスピードをだしていたのか、数メートル先まで飛ばされた。

「キヤアアアツツ！！！！」

「おいつ！ 意識はあるか！？」

「き、救急車を呼べ！！！」

オレの近くでうるさい声がする。

あー、意識はあるよ…。

??この赤い血みみたいな液体は？

あ、オレの血？

そつだよな、巻き添え食らったもんな…。

死ぬのかな…。

ま、いつか。

悲しむ親はとつくの昔に死んだし…。

それに、親はオレが死んでも喜ぶだろうし…。

ああ…これでアイツのところに逝ける…？

思い出す…今までの人生を…。

…懐かしいな……。

「おい！！ 死ぬなよ！」

「大至急来てください！！」

ああ、救急車、呼んだのか…。

でも…。

オレは眠いから…。



「……きろ……起きろ、風間南!!」

「……」

起きたけど、知らない声なので寝たふりだな。

「起きてくださいよ。。」

じゃないと、オレはずっとオマエを呼ばなきゃいけないんだ

よ

……それはしつこいな。

「…なんだよ」

「おっ ようやく起きたか」

目を開けるが、やはり知らない男。

髪の色は金と銀が混ざったような綺麗な色で、目は空色。

外人か…？

「で？誰だよテメエは」

「ん？神だ！」

「冗談はいいから誰だよ」

「だーかーらー！！か・み・さ・まー！！！」



.....は？

「...信じてねエって顔してんな...」

「アタリマエ。」

どこにいきなり『神』つつわれて信じる奴がいるんだよ」

「え　？案外いるぞ？」

「...本当にそんな奴いたら見てみたいな」

「まっその話はおいとして。」

なんでここにいるか分かるか？」

「こっつつわれても.....」。

なんもない、あたり一面真っ白。

来たことが無ければ、見たことすら無い。

真っ白過ぎて天井があるのかも分からない。

あ……。

「死んだ……からか？」

「おお　！オマエは優秀だな！！正解だ」

「やっぱりなあ……。」

「んで、オレになんか用？つつかこご下」

一番疑問に思っていることを聞いてみた。

「ここは……まあ、狭間みたいな場所だ。

神と、神が許可した者した入れねーんだぜ！」

あー、こーやって『自分は本物の神様です』と伝えようとしてんのか…。

残念、オレにその手は効かねーよ。

「反応薄いな…まあいいけどよ」

「で、どうして死んだからって狭間なんかにいるんだ？」

天国なり、地獄なりに早く連れてけよ」

オレとしては、アイツがいる場所希望だな。

「ああ、じゃあ説明しないとな……悪イ」

…いきなり頭を下げた謝られた。

「何が？」

するとこの男はバツの悪そうな顔をし、こう言った。

「オマエが死んだの、オレの手違いなんだわ」

……………。

「さ、殺気を収めてください……」

今度はビクビクしながら言ってきた。

「あのさー、そんなの無理に決まってるよな？」

勝手に殺されたのに、さらに謝罪の気持ちが入ってない謝り方。

…ケンカ売ってんのか、このクソ野郎？」

オレは満面の笑みで言ってやった。

目は笑ってないけどな。

「じつごめんなさいイイ」

男はとっさに土下座した。

うん、正しい判断だな。

「それでいい。ずっとそのままにいる」

「ハイ…」

「で？オレはこのままよく分かんねェこの真っ白な世界で生きていくのか？」

「いえ…転生してもらいたいのですが…」

は…？

転生？

よく小説とかである、あの転生か？

「なんでだよ」

「普通喜ぶ場所だと思いますが…」。

理由は、あなたは本来まだ生きているので、天国にも地獄にも逝けないんです」

逝くって…。

「なので、ほかの…つまり、さっきまで居た世界とは別の、元から“風間南”という人間が存在しない世界にいつてもらいます」

「オレが…元からない世界？」

「ハイ…そうすればあなたは生きられますし、オレも面倒なことしなくて済みますしね」

てへっ、と右手を頭に当てながら話す男。

ピキイッ！

あ…オレの中の何かが切れた。

「それで、行く世界なのですが…って、え!？」

やめてください…。

ぎゃああああああっっっ!!…!!…!!…!!



「んで？どこの世界に行くんだ？」

オレは、全身ボッコボコになった男に向かって聞いた。

なんでこんなにボッコボコになってんだろっな。

笑えてくる。

「か…『家庭教師ヒットマンREBORN！』<sup>かてきよー</sup><sup>リボーン</sup>の世界です…」

「！？リボーン！？あれはマンガの世界だぜ！？？」

「はい……ダメですか……？」

男はビクビクしながら聞いてくる。

「…メンドクせーけど、いいぜ…原作も知ってるしな」

知ってる、つってもせいぜいジャンプで読んで、小説はレンタルで読んだ程度だけだな。

だから正確にはあんま覚えてない。

確か…アレだろ？

戦い嫌いなダメ人間の沢田綱吉がリボンと会って、マフィアにさられていくって…。

ま、テキトーに過ごそう。

オレが言つと男は花が咲いたような笑顔になり…。

「じゃあ、すぐに行きましょう!」

立ち上がってオレに手を向けた。

「は?ちょい待て…ってホントにすぐかよ!」

オレの全身が白く光り始めた。

絶対今すぐ行くことになんだろ!!

まだ聞きてーことあんのによ!

「それじゃあ、第二の人生楽しんでくださいっ!!」

「」のッッ!!」

次会った時覚悟してろよ

!!!!」

ここでオレは意識を失った。

真っ白な世界：狭間に1人残った神。

「や、やっぱりもうちょい時間かけてからにすればよかった…」

今更後悔している。

だが、もう遅い。

南はこの男、神に次会った時にどうするかを決めているのだ。

「あ、オレの名前教えるの忘れた…」

また後悔が増えた神だった。

Episode 2 神からの贈り物！

…ここは？

オレは確か…。

ああ、そうだった。

勝手に神に殺され、さらに勝手にリボーンの世界に転生させられた  
んだっとな…。

でもここはどこだ？

オレはベッドで寝ていた。

辺りを見渡すと、なんだか見慣れた風景。

なんだ、オレの家じゃん。

起き上がると、紙が一枚。

こんなモノ、オレは置いてなかったな。

…誰からか、想像できたので読んでみた。

『どうも！神です！』

これは、言い忘れたことを伝えるために書きました！

まず、オレの名前を教える。オレは十雅<sup>トオガ</sup>！！

いくら神だって、名前くらいあるんだぜ？

今度会ったときは、十雅<sup>トオガ</sup>って呼んでくれよな！



次に、オマエが今いる場所は、この世界でオマエの家となる場所だ！

かなり高級マンションだからな。

もちろん一人暮らしだ。

冷蔵庫に一週間分くらいの食いもんは入ってる。

贅沢な生活ができるぜ！

次に：この世界でのオマエの設定だ。

両親はすでに他界。

理由は、前世の両親と同じだ。

今は中学生だ 沢田綱吉と同じ学年だからな。

まあ、オマエ自身の情報は前世からの続き、といった感じだな。

前の学校を辞めて、並盛町に引っ越し、並中に通うことになった。

まあ、こんな感じだな。

制服はもちろん男子用。

許可も貰ってあるから安心して登校しろ。

ああ、クローゼットの中に入ってるからな。

学校に持っていくものはベッドの横に置いてあるカバンの中に入ってるからな。

その中のモノも説明しとくか。

まず、並中の学生証。

次にケータイ。

これはオマエが前世で使っていたモノと全く一緒だ。

三つめは財布。

金は五千円程度だが減ったらオレに言えよ！

生活しやすいくらいに増やしてやるから。

家賃や光熱費もだしてやるよ。

んで、iPot touch。

これは、無いと暇つぶしできねエだろ？

最後に、オレからの贈り物だ！

小型ノートパソコンの形をしているが、特殊能力のようなものが

いっぱい入っている。

もちろん、普通にパソコンとしても使えるからな。

かなり軽いから持ち運びも便利だぜ！

家にあるものは前世のオマエが持っていたモノに少し足した程度だ。

…まあ、こんくらいかな。

じゃあ頑張れ！

オレのことを呼べばオレは出てくるし、オレに会いたいって思いながら寝ればさっきの狭間の世界でオレに会えるからさ！

じゃーな！

十雅』

かなり長い手紙を読み終え、ベッドの隣に置いてあったカバンを取る。

革製じゃない、フツのスクールバッグの黒。

なんだ、これも前世と同じかよ。

なんか同じモノばかりで転生したって感じしねーな…。

中身を確認すると、手紙に書いてあったものが入ってた。

並中の学生証。

…ああ、やっぱりオレは転生したんだな…。

この世界には、アイツはいるんだろうか？

前世でのたった1つの悔い。

…もう二度目の人生だ。

この人生で悔いは絶対にしたくない。

そう思い、時間を確認する。

7時10分頃。

転校初日に遅刻はしたくないので朝食を作る。

…とはいっても、パンを焼くだけ。

そして制服に着替え、前世でも常に付けていたリングネックレスをつけ玄関に行く。

鏡を見たところ容姿は前世と変わっていなかったので安心した。

…もし変わってたら鏡見るたびに『誰だ?』になるしな…。

ま、よかったな。

重たいドアを開け、家を出る。

ああ…前世の家を出た風景を随分違う。

……もう、オレが知っている風景は家以外に無いのか…。

後悔や、名残惜しい気はしない。

ここから…今から、オレの人生は始まるのだから。

こうして、オレの第二の人生が幕を開けた。

**E p i s o d i o 3 並 中 !**

「あーあ…疲れた」

オレは今登校中だ。

只今の時刻、 7時40分。

ダルイからゆっくり支度した。

それにオレは朝弱いからな。

ハア、とため息をつき並中へ向かう。

なんで並中の行き方が分かるのかって？

……ホント、何でだろうな。



まあ…迷うよりマシか。

だんだん並中が視界に入ってきた。

ふむふむ。確かに並中だ。

どんなだったかは忘れたが、『並盛中学校』って書いてあるし。

オレはゆっくりと並中に入っていった。

登校時間は約8分か。

良くも悪くもない。

近すぎるのは嫌いだし、遠いのも嫌いだからな。

ちょっとだけ十雅に感謝した南であった。

同時刻、応接室。

「草壁、今日転校してくるっていう転校生の書類は？」

並盛最強といわれている雲雀恭弥が自分より、はるかに大柄でリーゼントの男に聞いた。

「それが……」

草壁といわれた男は少し戸惑いながら言った。

「名前、住所、電話番号といったものしか分からなかったのですが

…

「……………」

「い…委員長？」

返事をしない雲雀を不思議に思っつて、草壁は雲雀に声をかけた。

雲雀は無言で草壁から、少ししか書かれていない転校生の書類を取る。

「風間南…久しぶりに楽しめそうだよ」

雲雀は楽しそうに南の書類を置いた。

そんなことも全く知らず、南は職員室へ向かう。

自分のクラスが何組かを知るためだ。

「今日、転校生が来るんですって？」

「そうなんですよ。私のクラスになりました」

一人の女性教師と男性教師が話していた。

おそらく今日来る転校生は南のことだ。

「1 - Aですかー。風間さん…でしたわよね？」

「ああ、風間南というらしいですよ。問題児でないことを祈るばかりですね」

南はそれをしっかりと聞いていた。

だが、別に怒っている気配はない。

『教師が新しく来る生徒は問題児ではないことを祈るのなんて普通

「じゃね？」

「思っているからだ。」

「1 - A ね……」

南は職員室に行かなくてもクラスが分かったため屋上へ行くことにした。

『並中といえは、やっぱり屋上だよな！』という理由からだ……。

「おおー、ここが屋上かぁ…」

まだ朝早く（といってももう7時50分は過ぎているが）屋上には誰もいなかった。

ここで南に疑問が一つ。

今、原作開始からどのくらい前、または後なのか。



「……………まあ、教室行ったら分かるか」

考えても無駄だと分かり南はポ　　っとしていたことにした。

キンコーンカーンコーン…。

学校中にチャイムが鳴り響いた。

「8時の予鈴か…ふああ…」

南を睡魔が襲った。

改めていうが、南は朝がとても苦手だ。

もちろん睡魔などに勝てるハズもなく、勝とうともせず。

南は壁に寄りかかってグッスリと寝てしまった。

キーンコーンカーンコーン。

「……………んー？8時25分の予鈴　？」

仕方ない…そろそろ行くか…」

南は珍しくしっぴかり目が覚め、ゆっくりと教室に向かって行った。

「席に着けー。転校生を紹介する」

あれから教室に向かい、担任に『よく教室わかったなあ』と言われた。

時間もギリギリではあったが間に合った。

「よし。風間ー、入って来い」

「……」

無言でドアを開け、教室内に入る。

「転校生の風間南だ。風間、自己紹介をしろ」

教師は黒板に『風間 南』と書いた。

「風間南だ…。あー、一応女子だけど、まあ気にしないでいい。

…席ってどこだ？」

『自己紹介か？アレ！？』と言いたそうな奴が何人かいるがドーンデモいい。

『かつこいい…』とか言ってる奴もいるが、無視だ無視！！

「あ…ああ。その、一番窓側の席だ」

見ると、一番窓側で一番後ろの席が空いていた。

そのままその席に歩いて行って座った。

原作はつと…。

教室内を見渡すと、まだ獄寺もない。

原作開始前なのか？

…まあいいか。

オレは眠いので寝ることにした。

「よつ十雅!！」

ただ寝るのもなんだかつまらないと思い、十雅に会いにいったのだ。

「あ、来たか!んで、どーかしたか?つてまた      !?」

ぎいやあああああ……!!!!!」

「当たり前だあ!!よくも待てと言っているのに勝手に送り込みやがったな!!」

名前で呼んでもらったのを感謝して欲しいくらいだ!!」

「うう…すみません…」

十雅は正座して言った。

「ふん…まあいい。」

それより、今原作開始までどのくらい時間あるんだ？」

「えっと…体育の授業から開始です」

「いつのだよ」

「え…それは…忘れちゃいボブウ…!!」

十雅が忘れた、と言いつうになった途端、南のアップパーがヒットした。



「使えねーな…じゃあオレはもう行く。

「じゃーな！」

「あー！ちょっとちょっと待って！

…っつもういね　　！！！！

言い忘れたことがあったのにいー！！」

十雅の叫びがこだました。

パチツと目が覚めた南。

「ねえねえ風間さん！」

「どこから来たの？」

ワイワイと知らないうちにオレを囲んで群れができていた。

イラッときたのは言うまでもないだろう。

「風間さあーん！」

「…づるせえ。こっから去れ。」

目障りだ」

「かつこい　　！！」

「キヤ　　！！！！」

本当にウルセエの、わかんねーのかよ…。

ああ、なんかもうメンドイ。

サボってかーえろっ！！

「いいから散れ」

オレが殺気混じりに言うと、皆が散った。

ふう…これで帰れる。

今は休み時間。

教師が来る前に、と思いカバンを取る。

そして、のんびりと帰った。

帰り際に南は思った。

『転校初日からサボって大丈夫なのか』

しかしそんなことを気にする南ではないのだった。

## Episodio 4 雲に会う！

並中に通うことになって、2日目。

1日目はかったるくなって帰った。

「あー、教師に何か言われそーだな…。

ま、無視すりゃいつか」

南は前世で、学校に毎日行くような人間では無かった。

しかし、それで教師に怒られたことは無かった。

だから今、南はのんびりと学校に向かっている。

それも既に遅刻している。

今は9時。

それなのに南は決して焦らない。

そして学校に着いた。

ガラララッ。

教室のドアを開けると、教師も生徒も皆、南を見る。

「キサマは転校生の風間だな!？」

教師が聞いてくる。

「…だつたら?」

「遅刻だ! 転校初日は無断早退。二日目は遅刻。」

全く…とんでもない問題児が来てしまったようだな…」

ワザとらしく、声を大きくして言うてくる。

「学校来て何になるんだよ? オレにとってこの学校のレベルは低すぎる。だからタイクツ。」

それに、問題児だと言いたければ言えばいいじゃねえか。オレは何だっつていい」

ドカツ、と椅子に座る。

周りが『あの根津が押されてる!!』『すんげーいい気分』とか  
言っている。

根津、というのはこの教師のことだろう。

「……いいだろう。このことは校長にも話しておくがな。」

では、風間を無視して授業を進める!!」

根津は授業を再開した。

だが南には、タイクツで仕方ない。



そして何を思ったのか、ふと席を立った。

「……今度は何だ!!」

ため息交じりに聞いてくる。

「……オレを無視すんじゃないかったのか？」

「ぐっ……」

南はそのまま、教室を出た。

向かったのは、屋上。

誰もいない、静かな場所に行きたかったのだ。

ギイイ…。

屋上へと続く、ドアを開ける。

「…あり？先客がいたか…」

屋上には、学ランを着て眠る男子生徒がいた。

そしてその男子生徒は南に気付き、目を開ける。

「君…誰？今は授業中のはずだけど」

「授業なんかつまんねーから抜けたんだよ」

「…その赤い髪… 1 - Aに転入した、風間南だね」

男子生徒は立ち上がりながら聞いてきた。

「おっ、正解」

「君は昨日、無断早退をされていて、今日も遅刻している…」。

僕が今、ここで咬み殺してあげるよ」

「楽しそうだが、断る。ここで並盛最強の男、雲雀恭弥と戦いたくはないからな」

すると、ピクリ、と反応した。

「…やっぱり、僕のことを知っているのか」

「ああ。武器は仕込みトンファー。並中大好きな風紀委員長たる？」

「……君、一体何者？」

男…雲雀はトンファーを構えながら聞いた。

「そんなに警戒しなくてもな…。オレは風間南、それ以上でも、それ以下でもない、ただの一般人」

「一般人なわけないよね。現に君の情報をあまり得られなかった」

「（あーそりゃそうだろうな…）それは残念だったな！。

じゃあオレは学校嫌いな自由を好む者、とでも考えておいてくれよ。

そして秘密主義者、とでも」

ケラケラ笑いながら南は言う。

何を思ったのか、雲雀はトンファーを下げた。

「…どーしたんだ？」

「今、君を相手にしてもつまらなそうだからね。殺<sup>や</sup>る気がある時じゃないと戦わないタイプだろ？」

「おっ正解 情報に追加しておけ。『気分屋』とな」

「どーでもいいよ」

キンコーンカーンコーン。

チャイムが鳴り響いた。

「あー、次は体育だったな…」

「次の授業には出なよ」

「えー…（あ、まてよ…確かにボーンの始まりって沢田がボールに顔面直撃するところだ…）」

「はあ、わかったよ」

「じゃあね」

「おう、またな」

こうして南は屋上を出て行った。

そして教室には戻らず、そのまま体育館に向かう。

つまり、制服のままです。

雲雀に『授業に出る』と言われて『わかった』と答えたのに、早速約束を破っているが…。

「ん…ううか…」

体育館の目の前に立ち、呟く。

もう授業開始のチャイムは鳴っていて、中では授業中だろう。

再び怒られるのもメンドクサイので、南はこっそりと見ることにした。

もちろん、主人公である沢田綱吉を。

「ぶっ  
」

ベチャツ、と沢田の顔面にボールが直撃した。

「……アイツが運動神経無いのは知っていた……だけどもさか……ここまでとは……」

南はリボーンの話の最初の頃の話を知らない。

読んでいたが、黒曜編に入るまでは何となく流し読みしてた程度だった。



第一話はしっかりと読んでいたのだが…。

なので知らないに等しい状況だ。

「……アレがりボンと会って、あんなに変わるのか……」

沢田のダメダメっぷりを見ながら、南は呟いた。

それから数分経った。

沢田のダメダメっぷりに呆れ、南は帰り始めた。

「ちて…」それから楽しませてくれよ…?」

遠くから誰にも聞こえないほど小さな声で、そう、言い残して。

Episodio 5 霧に会う！

「いよっしゃ〜！！学校休みイ！！！！」

今日は学校休みでテンションMAXなんだ

え？学校あつてもサボってて休みみたいなモンだろって？

気分が違うよ〜、気分が〜。

休みみたいなことに否定はしないけどな！

だつてさ。

学校サボったらあの風紀委員長サンがオレを咬み殺しに来るんだもん…。

ああ、球技大会の日もサボって、商店街ウロウロしてた時に会ったのは大変だったな…。

「どーしよっかな　。」

アイスでも買って食うか!!」

そう言い、オレは家を出た。

並盛商店街。

オレは今、手にアイスが二個入ったビニール袋を持って歩いている。

なんで二個もかって？

チョコと抹茶と悩んだんだよ。

どうせ十雅の金だしいいや！！ってな。

でも持って帰るとアイス溶けちまうからな。  
。

お！！ベンチ発見！

ベンチに座って食うか

オレはベンチのある公園に向かった。

「誰もいね。まあ、よかったな…」

公園には誰もいなかった。

オレ的には超嬉しいぜ？

うるさいガキ共がいなくて。

オレはベンチに座り、抹茶アイスを食べ始めた。

数十秒経ったら、公園に一人の女の子が来た。

オレと同じ年齢ぐらいだと思っ。

…なんか見覚えあるんだよね。

藍色っぽい肩下まである髪、同じく藍色っぽい大きな瞳、そして真っ白のワンピース。

誰だっけな？

クラスの奴ではないと思うんだけど…。



悩むのもイヤだし、声をかけてみるか!!

「おい!!オマエ一人?一人ならオレとアイス食わねエ?」

少女は突然声をかけられたことに驚いた様子。

「オレ今もう一個アイス持ってんだ。つい買ったんだけど、溶けちゃうからさ!!」

食ってくんねエ?」

「いいの...?私が食べて...も...」

「いいのってか食ってくれ!!」

「...ありがとう」

少女は顔を少し赤くして、オレからチョコアイスを受け取り、隣に座った。

「どういたしまして。オレは風間南」

「私は…凧…」

「ああ、よろしくな！凧！」

そして軽く挨拶をして、黙々とアイスを食べる。

「なあ、凧とオレって前にどっかで会ったっけ？」

「え…無いと思う…」

「だよなー…」

でもなんか知った声なんだよ……。

リボーン的主要キャラ？

でも女キャラで……。

……ん？

クロームってキャラがいたな……。

確か骸の代わり、とか……。

んん？

…クロームはもう一つの名前があつて……。

「あ……そうだ。だから見覚えあんのか」

「？」

声に出したから、風が不思議がつている。

クローム「風だったんだよな……。

原作に出たのは少しだったし、小説はうる覚えだしな……。

「あ、いや……なんでもねえよー！」

「うん？」

気づけばもうアイスは無くなっていた。

「…なあ、凧はまだ時間あるか？」

「えっ…う、うん…！」

「じゃあ、一緒に遊ばねえ？」

「い…いいの…？」

「もちろん…！」

つつかオレ的には遊んでほしいしな

「…ありがとう。でも、どこ行くの？」

「んーと、ちょっとじいじできてくねるか？」

「うん…」

そう言い、オレ達は公園を出た。

「ここだー!!」

オレは風に言う。

「……?」

「ああ。『ラ・ナミモリーヌ』つつつて、ケーキがかなりウマいらしいぜー!!」

来てみたかったんだよー!!ココー!!

「ケーキ屋さん？」

「素晴らしいぜ！オレも来たことないんだけど…。とにかく中入ろう！」

店の中に入った。

「いらっしやいませー」

おお、ケーキのいい匂いだ。

「風、どれが食べたい？」

「あ…私、お金持ってないから…」

あー、散歩してたような感じだったしな。



「いってー！オレがおる。ついてきてもらったんだし！」

「でも…」

「いって、いってー！ほら、ウマそつだぜ？」

「…ありがとう」

「どづいたしまして。」

オレはチーズケーキにしようかな…風は？」

「あ…同じの…」

あー、こりゃ遠慮してんな…。

「分かった。ちょっと待っていてくれよ！買ってくる」

「…うん」

そして、ケーキを買い、凧と二人で食べた。

「ウマかった　　！！！！噂は本当だったな！！！」

「あの……ありがとう……風間……君……」

「南でいって。ちなみにオレ、女だぜ？」

「え……」

凧は足を止めた。

「あ……じゅめんなさい……！」

「い、いや……しゅっちゅうあることだし、気にすんな？」

「でも……」

ま、性別間違えるなんてしちゃったら気にするよな……。

オレは別にいいけど。

「んじゃあさ、一つ約束してくんね？」

「約束……？」

「ああ。また遊んでくれるか？」

すると凧は満面の笑みを見せた。

「うんー!」

「んじゃ、それでチャラっつーことで」

「でも…そんなのでいいの?」

「オレは全く気にしてないからいいんだって!あ、あとメアド教えてくれ」

「あ、うん…」

赤外線通信をして、登録する。

あー、そっぴや登録一人目だな。

前世ではアイツだけだったし…。

ふっ、と笑みが零れた。<sup>こぼ</sup>

「…どうしたの？」

「あ、いや…何でもねえよ。んじゃ、いつでも連絡してくれよ！」

「うん！」

じゃあな、とお別れをして家に帰った。

二度目の人生で、初めて友達ができた瞬間だった。

Episode 6 風紀委員！

よっす！

南だ！！

皆さんに一つ聞いてもいいですか？

あなたはグツスリ眠っています。

時刻は朝の5時です。

その刹那、携帯電話が鳴り始めました。

マナーモードにしていなかったので、『プルルルルル』と音を鳴らしています。

携帯を見ると、知らない番号。

知らない人でしたし、もちろん出ません。

しかし、その電話は一回切れても何度も何度もかかってきます。

もう5分は経ちました。

でもまだ電話は鳴り続けます。

さて、どうする!?

その? 電話に出る

その? ムシを続ける

その? 電話を切る

オレがとった行動は、?だ!!

理由?

なんかオレの第六感が、『出ないともっととどろいごとになる』って察知したからだよ。

「もっしもーし」

『君、喧嘩売ってるの?』

「!?!この声、オマエ雲雀か?

つたく何の用だよ…。休日のこんな朝早くに…」

『10分以内に応接室来て「無理に決まってんだろ!!それにイヤだし!!」」

来なかったらどうなるか分かるよね?』

「…ワカリマセンガ?ソレガナニカ?」

『まあいいや。じゃあね』



一方的に電話をかけられ、電話を切られ…。

「オレって不幸…」

行かないと咬み殺されるんだろうな。

メンドクサイけど、戦うことになった方がメンドイ。

「仕方ない…。行くか」

オレは嫌々私服に着替え、朝早い並盛町を歩いた。

「ンで？何の用ですか？」

ガラス、とドアを開けながら言う。

「来たんだ。僕が家に行つて咬み殺さなきゃいけないかと思つてたよ」

「は！？家つて…場所知つてんのかよ！？」

「校長に聞けばいいだけだよ」

「……………なら来てよかった…」

うん…本当よかった…。

「でも、なんで私服で来たの？休日とはいえど、ここは学校だよ？」

ヤバい！！！！

南は直感した。

今の服装は、黒いダメージジーンズ、紫色のガラの入った長Tシャツの上に緑色のパーカー。

指や手首にはアクセサリーが付いている。

遊びにでも行くの？と言われそうな、到底学校に行くような格好ではなかった。

しかし……………。

「まあいいや。それより今日は君に話があったね」

よ……………よかったあああああ！……………！！

極悪非道の並盛中学校風紀委員長様から許しが出たよ……………！！

「話？」

「うん。君、風紀委員に入り「無理」」

即答したよ？

うん。

「断るのなら、学校に私服なんかで来た罰として咬み殺してあげるよ」

「そ、それは丁重にお断りシマス」

「ほら、ここにサインしなよ」

「オイオイオイオイ、勝手に話飛んでね？いつの間にオレが許可したみたいになつてんの？！」

「うるさいな。早く書いてよ」

話聞けよ！！コイツ！！！！

「む、無理！！って何オレに差し出して「契約書だよ」

あ、契約書？イリマセンケド？」

「だから、君に拒否権はないんだって何度も言ってるでしょ？」

早く書いてくれない？僕眠いんだけど」

「オマエが朝5時に呼びだしたんだよな！！」

…条件次第で入ってもいいぜ？」

ここで、ピクリ、と雲雀が反応する。

「…条件？」

「ああ！

一つ目、オレは朝早くに学校に来るつもりはない。一般生徒と同じ時間に登校する。

二つ目、無断欠席、無断早退、遅刻、そういったものを全て許可する。

三つ目、オレの武器の所持を認める。

四つ目、もしもオレが誰かと仲良くなって、そいつと一緒にいて

も攻撃しない。

五つ目、中学校は三年間通って、卒業したら風紀委員は抜ける。

…まあ、こんくらいかな」

オレは一、二、三、四、五、と指を立てながら話した。

最後のが変だった？

未来編を覚えていますか？

『風紀財団』なんてものがあつたでしょう？

あれは並中風紀委員を母体としてある組織ですよ？

ハイ。『？』ばっかでゴメンナサイ。

「……………」

雲雀は数秒考えている。

オレは風紀委員に入る気なんてないのさ!!

こんだけ条件を付ければ諦めて

「いゝよ」

「いいのかよ!?!」

くねなかった。

「どござせ、」これだけ条件を付ければ諦める『とでも思ったんでし  
よ。

残念ながらそうはいかないよ」

「.....」



オレの悲鳴が朝早い校舎に響いた。

「うるさいよ。早くサインしてくれる?」

「くそ…なんでこんな条件つけてまでオレを風紀委員にさせたいんだよ…」

サインをしながら聞く。

「君は面白そうだからね」

「それだけかよ…あーもう疲れた」

サインをし終え、ソファアに座る。

ふう、とため息をついた時。

「失礼します！」

委員長！新しく風紀委員に入る者がいると聞いたのですが……」

あ、副委員長の草壁サンだ。

「本当だよ」

「そうですか……。？この人は？」

そう言い、オレの方を見る草壁さん。

「今日から風紀委員に入ることになっちまりました、風間南ツス

よろしく願いしやーす」

「君だったのか…私は副委員長草壁と言います。あの、こちらを…」

手に持った紙袋を渡された。

「…これ、なんですか…？」

「それは学ランです。風紀委員になった者には着用してもらっているのです」

「…それって女でも着なきゃダメっすか…？」

オレの言葉を聞いて、驚いている。

ま、そつだよな…。

私服も全て男モノだし…。

「…女子……？」

「ああ。オレは一応女子っすよ……。それでもダメっすか……？」

数秒考える草壁。

そこに雲雀が口を挟む。

「いいんじゃない？風間南は普段も男子用制服着てるからね」

「オマエは黙れよ……！」

「あ、それならよろしくお願いします」

くそう…雲雀が口を挟まなければオレは今まで通りでよかったのに…。

「腕章は委員長が持っていますので受け取ってください。

それでは、失礼しました」

それだけ言い残し、草壁副委員長は応接室を出て行った。

ああ、そうだ…。

腕章もあんのか…。

「腕章って付けなきゃダメだよ。付けないと言っのなら、僕が今すぐ咬み殺してあげるよ」「」

即答

!!!!

「じゃ、じゃあさー！せめて学ランの着方はオレの自由にさせて！  
！そうしてくれたらちゃんと付けるからー！」

「ハア…どの道腕章は付けさせるけど、それくらいは自由にさせて  
あげるよ。」

その分仕事は増やすけどね

「エ……………」

「変更は認めないよ。ほら、腕章」

雲雀は腕章を持ってきて、机の上に置かれている学ランの上に置い  
た。

「うーす…。じゃあ帰る…」

オレは学ランと腕章という拷問的しつもんてきなモノを持って家に帰ろうとした。

「ねえ、君って何か武器持ってるの？」

「…ハイ？」

突然悪魔：もはや大魔王様がオレに聞いてきた。

「さっきの条件で『武器の所持を認める』って言ったでしょ。どんな武器なのかと思ってね」

あ、あれか。

「今そこは何も。だけどコレにしようかな、ってのはあるが…。それでも？」

「うん。どんなものなの？」

「短剣。あ、ただ一刀じゃなく二刀な」

今十雅に作らせてるんだ！

もう何十回かダメ出ししたけど…。

「ふーん…。まあいいや」

…まあいいなら聞くなよ…！

「じゃ、オレ帰るわ。じゃーなー」

こうしてオレは心接室を後にした

。



そして次の日。

オレは遅刻確実…もう10時なのにも関わらず、ゆっくりりと学校に向かって歩いていた。

……昨日ムリヤリ渡された学ランを着て、腕章をつけてな……！

でも普通の着方はしてないぜ？

＼シャツの中に紫色のＴシャツを着ているからな。

ガラララッ。

教室のドアを開けた。

皆、静かにオレを…いや、オレの腕章を見ていた。

顔を真っ青にして…。

「君!!遅刻してくると…は……………」

教師がオレを見て、怒鳴ったかと思いきや、震え始めた。

そうだよな…。

学ラン着て、腕章付けてたらそうなるよな…。

「何か用スか？」

オレは教師に聞いた。

「ななななな何でもないですっっっ!!…!!いつ、今テストをしているのですが、どうですか？」

あ!!…嫌ならいいんです!!…!!」

プルプルと手を震わせながらプリントを渡してくる。

まあ、暇だし…。

中一の問題なんてオレには問題ですらねエし…。

「別にいーっスよ…」

オレはプリントを貰う

『ありがとうございます…!!』とか聞こえるが、気にしない、気にしないと…。

オレは席に着き、プリントを見る。

理科…か…。

オレはスラスラと書き、一分弱で終わらせた。

それを教師が見ると、

「回収します!!」

と言った。

「先生!まだ10分しか経ってないのですが…」

「20分って言ってたじゃないですかー」

とか、いろいろ聞こえる。

「か…風間さんが終わってしまったんだ!!一番後ろの席の人!!早くしなさい!!」

その列は後ろから二番目の人!!」

と言って指をさすのはオレの列。

オレがいるからねえ…。

先ほど文句言っていた声は一瞬で消えていた。

プリントを回収し終えた教師は

「本日は根津先生の代わりなので、説明の仕方が少々変わるかもしれませんが許してください」

と言う。

… どんだけ怯えてんだヨ。

本来なら根津の奴が理科の担当なのか…。

そーだ！テスト返却の時、根津をハメてやろう

でも、ヒマだな。

…よし！

ガタツ。

オレは席を立った。

「！？風間さん！？どうかしましたか！？」

「ヒマだから応接室行きます。そうじゃ」

オレはそのまま応接室に向かっていた。

教室に残された教師と生徒達は南の出て行ったドアを茫然ぼうぜんと見ていた。

Episode 7 大空と少し仲良くなり、イエローに会う！

「今日も遅刻」 朝ゆっくりできるってサイコーだな！」

昨日に引き続き、またも余裕で遅刻している風間南だ！

今の時間ー？

11時になるな、もうすぐ。

でも気にしない、気にしない

風紀委員として遅刻が許され、超自由人となった南はあり得ない時間でもゆっくと、一瞬たりとも焦らずに学校に行くのでした。



応接室。

「ねえ…いくらなんでも初日からあり得ない時間で登校しないでくれる?」

「え。。いーじゃん別に…」

オレは学校に着いて、教室で授業受ける気にもならなかったのです。そのまま応接室にGO!したのです。

「それに君は授業もサボってるの?今日一度でも教室に行った?」

「いんや。今学校に来たばかりだけど?」

「じゃあ君は教室で授業受けてきなよ。それとも、書類整理をやるかい?」

「!?!なにその究極の二択!!それなら教室行ってくるよ…」。

「じゃーな!」

オレは嫌々教室に行った。

「ん？すぐに書類整理をやらされなかっただけで十分か……」

ガラッ！！

「「「「」……「「「「」

お！今日は教師までも静かだ。

…アレ？なんか席順おかしくない？

「かかかかか風間さん！あなたの席は変えてないのであそこです！！」

よろしいでしょうか!？」

「…変えてないってどういうことだ」

「ハイハイハイ！！」

実は、効率よく授業を進めるために、この時間だけ席替えをしてもらったんです!！」

「あー…わかった」

効率よく、か…ただ単にバカが後ろに来るようにしただけじゃん。

オレに席の隣は、沢田綱吉…。

確かにバカだけどさ…。

ハア…ここで原作キャラと関わるのか…？

あんま原作変えたくねェし、メンドイし…。

「よ…よろしく願いします…風間さん…」

沢田がオレに話しかけてきた。

…沢田ってこんなに度胸ある奴だったんだな…。

「…ああ…」

オレがそれだけ言っと、周りで

「おい！ツナが風間さんと話してるぞ！！」

「やっぱり最近ツナってすげーな…」

とかいろいろ言っている。

授業は

数学か…。

オレ、どの教科でも満点取れる自信あるけど、数学は特に得意なんだぜ？

そして、オレは教科書を開いた。

沢田はきつと、『風間さんも勉強するんだ…教科書になんか書いてあるかな』とでも思ったんだろう。

沢田がオレの教科書を覗き込んできた。

「な！？何これ

！！！！！？！？」

沢田がいきなり叫んだ。

正直言つて、ウルサ過ぎ。

ボコられたいんですか？と思う。

「……………何か用？」

オレが低い声で言い、冷たい視線をぶつけて言った。

ああ、微量だが殺気も混ぜてるぜ？

周りからは

「ツナ…殺されるんじゃないか？」

「…愁傷様」

とか言われてる。

「え！??あ…あの…」

とモゴモゴ言ってる聞こえない。

「ハッキリ言え」

この一言で周りがこそこそ言っていた声も一瞬で消えました。



「えっと…その教科書、オレ達のと少し違うなって思ってた…よくわかんないことばかり書いてあるから…」

「あー、これは数学の教科書。」

ただ、トップ校に通う高校三年でようやく解けるようになる位のレベルのな」

「あ…ははは…そうなんだ…。」

(もう笑つことしかできね　　! ! ! ! ! )

「まあ…でもこんなの簡単すぎてつまんねエけど。沢田解いてみるか?」

こんくらいなら沢田でも解けんじゃね?

簡単だし。

「イヤイヤイヤイヤ、いいです!! オレはどーやっ たっ て解けない

だろっしー!!」

「あっそ」

オレはまた寝始めた。

それからオレを起こさないよう、静かに授業が再開されたらしい。

キンコーンカーンコーン。

「…昼飯…か…」

どうやら席替えタイムも終わったらしく、元通りの席になっていた。

購買で飯買ったか…。

オレはそう思い、席を立とうとしたその時。

「あ、あの…！風間さん…！」

オレを沢田が呼びとめた。

「……なんだよ……」

オレは今、腹減った&寝起き、という不機嫌な状態なのによー。

喧嘩売ってんのかあー???

「オ…オレに、勉強教えてください!!!」

頭を深く下げて頼んできた。

「…理由」

「は、はい?」

「オレに勉強教えてもらいたい、っつー理由は?」

「オレ…今家庭教師がいるんですけど、その家庭教師が答え間違えることにオレに攻撃してきて…。」

そっそれで、あんなに難しそうな問題が簡単すぎ、なんて言う風  
間さんに教えてもらえないかなって思って…」

「（そりゃあ、リポーンはイヤだろうな…）」

…よーするに、オレにその家庭教師の代わりにやれっつーことか  
…。

…まあ、いーぜ…」

そっ思ったのも何となくなんだけどなー。

主人公である沢田コメンがどんくらい頭いいのか…それを知りたかっただ  
けだからな。

オレが言つと、沢田は顔を上げた。

「ほ、本当ですか!？」

「ありがとっございま」ただし、一回だけな「…そっそれでもいい  
ですー!」

ありがとうございます…！」

沢田はまたオレに頭を下げた。

ここでまたメンドイことになる…。

「「「「風間さん！！私オレにも教えてください！！」「「「「

クラスのほぼ全員が言ってきた。

「…イヤだ。オレは一人だけにする。一番最初に言ってきた沢田のみだ。」

他の奴に教える気はない」

皆、嫉妬してるよ〜。

ドンマイ！

「沢田ー、今日の放課後オマエん家行くからな。場所は雲雀に聞くから。」

んじゃーな

オレはもう授業を受ける気が完璧に失せたので、カバンを持って応接室に行った。

もちろん、購買に寄ってからな

放課後。

オレは約束通り沢田の家に来た。

…まあ、時間がもう遅いけど…日が見えず、暗くなってるな…。

家の場所は雲雀に聞いて借りを作りたくなかったから校長に聞いた。

…答えるの、早かった…。

腕章見たとたん、敬語使いまくりだった…。

ピンポン。



「おじゃましてーす」

インターフォン鳴らして、すぐ!?!と思ったヤツもいるだろう。

ま、オレは教えてやる立場だからいいんだよ。

「あら?どなた?」

エプロンを付けた女の人が出てきた。

「風間南といます。沢田…沢田綱吉に勉強教えに来たんですけど…  
いますか?」

「あら!カッコいい男の子ね!ツナのお友達!?」友達では無いで  
す」

「?そっなの?」

「っつか沢田の母親にも男だと思われって…。」

「そんなに男っぽいか?オレ…。」

「はい、そーです。んで沢田綱吉はいますか?」

「ちょっと待ってね。ツナー…!お客様さんよー!…!」

「階段の上に向かって叫ぶ。」

「あ、うん!…!」

「ドダダダダ、と階段を下りてくる。」

「風間さん!!来てくれてありがとうございます!!」

沢田の私服…。

超フツーだな。

っつか服に『27』って書いてあるし…。

そんなに自分の名前好きなんだ…。

マグロなのに…。

「べつに。んで、なんの教科?」

「えっと…ほとんどは全部教えてもらいたいですけど、数学…で」

「数学な…じゃあ早く終わらせるぞ」

靴を脱ぎ、階段を上る。

部屋も至って普通だな。

床に座って、一枚のプリントを渡す。

すると沢田は一瞬で真っ青な顔になった。

「あ…あのー。これをやるんですか…？」

「何言ってるんだ。当然だろ？」

「…少ししかわかんないんですが…」

「それなら分かる問題だけでも解け。全くわかんないような問題も少し考えてみる」

「（この人、下手したらリボンよりもスパルタだ　　！！）

は、ハイ……」

「じゃあスタート」

こうして、オレと沢田のお勉強会が開催しましたとき。

それから数分。

「も、もう分かんないです……」

「見してみる………一問もできてない……バカにもほど  
があんだろ……」

そう、一問もできてなかった。

簡単なのになー！。

ちよっと高校で習う公式を使えばすぐ答え出るのに。

「…これって何年生対象の問題ですか？」

「並中生なら…高校二年？」

「そ、そんなのオレが解けるわけないじゃないですか…!!」

「黙れ」

オレの一言で静まった。

ほんとにコイツは騒がしい…。

ガチャ。

扉が開いて、誰かが入ってきた。

「ちゃおっす」

リボーンだ。

「リ、リボーン！！入ってきちゃダメだって言ったじゃないか！」

「うるせーぞ、ツナ。…で、オマエは誰だ？」

オレの方を見て聞いてきた。

「人の名を知りたいのなら、まず自分が名乗りな」

「……オレはリボーンだ」

「リボーン、ね。オレは風間南。最近沢田のクラスに転校してきた一般人だ」



「やっぱりオマエが風間か…。だが一般人なわけねーだろ」

はい？オレが一般人じゃないだと？

そんなことは無い。

オレは一般人だ。

でも反論するのも面倒だから、まあいつか。

つつかオレのこと知ってんなら聞いてくんじゃねーよ。

「そー思いたいなら思っとけ。で、何の用だ」

「特に用はねーぞ」

「リボン…！早く戻ってくれよ！」

「おめーは黙っとけ」

「んな…！」

…このガキ…殺気放ってやがるな…。

警戒してんのか…。

まあ無理はないだろうけどさ。

第一オレも少し殺気放ってるしー。

お互い様ってことで

「…なあ沢田」

「は、はい…!?」

「オレもつめんどくさくなってきたから帰るな」

「え…あ、はい…あ、ありがとうございました…」

「チビちゃんもじゃーな」

オレがリポーンチビちゃんに言うと、さらに大きな殺気を放ってきやがった。

「…ムカつくガキだ。」

「チビちゃん、なんて呼ぶんじゃないねえ」

「呼び方一つで文句言っな。チビちゃん」

「チツ……」

舌打ちとかムカつくー。

オレはそのまま沢田家を後にした。

「リ、リポーン……？」

南がいなくなつた沢田の部屋では、リポーンが難しそうな顔をして

いた。

「アイツ…何者なんだ…?」

「な、何者って…?」

「アイツはオレが最初この部屋に入ってきた時からずっと、殺気を放っていやがったんだ。

オレが放ってた殺気にも動じない…。

おまけにこないだ学校帰りをつけたが、気配が突然消えて見失っちゃった。

このオレを撒まいたんだ…ただモンじゃねえ…」

「おい!!何やってるんだよ!!風間さんを尾行するなんて…」

リポーンの暴露話に鋭くツッコミを入れる沢田。

「…何より、アイツのことを調べてもなかなかヒットしねえ…情報

が無えんだ…。ボンゴレの力を以てしても…な」

「??それって戸籍が無いつてこと?」

「いや、そっじゃねえ…あるにはあるが、情報が少なすぎるんだ…」

「……どういふこと?」

沢田の質問にしばらく考えるリボン。

「(ツナに言って、風間に警戒心を持たれても困るしな…)

何でもねえぞ。今の話は忘れとけ」

「じゃあ最初っから話すなよ!!」

「それはともかく、そろそろ飯の時間だぞ」

リボンは部屋を出て、階段を降り出した。

沢田は疑問を残したまま、ご飯を食べたのであった。

Episode 8 大空VS嵐!

「あーあ、昨日は沢田のせいで疲れた」

ハア、とため息を吐きながら南は登校していた。

時刻は9時。

普通は遅いと思うが、南にとっては早い時間。

昨日、雲雀から連絡があったからだ。

1 - Aに転入生が来る、と。

ちなみに二人来るらしい。



南は原作知識で知っている中で、獄寺が転校してくることを知っている。

その転入生が獄寺だと思い、学校に早く行くことにしたのだ。

もう一人が誰なのかは知らないが…。

ガラッ。

「おはようございますっ！風間さん！

今日は1時間目はHRで、転校生の紹介をしていました！」

やはり、キビキビと南に説明する教師。

「（来たか…）転校生？」

「はい、獄寺！山下！風間さんに自己紹介しろ！」

南は教師が言った『山下』という人物に驚く。



「じ、獄寺君！早く自己紹介をしなさい！」

教師は『南の気分をこれ以上悪くさせてたまるか！』と思って獄寺に言う。

「あー、オレもメンドイんでいや。後で雲雀に聞くしな」

獄寺は絶対自己紹介なんてしないから時間のムダだということをはわかっていた。

それよりも、山下という女の存在が気になった。

原作にいなかった人物がいる、このことを説明する方法が一つしか見当たらなかった。

南と同じ『転生者』である。

とりあえず十雅とお話することにして、南は席に座った。

あれから、オレは十雅に会いに行き、聞いた。

「お、南！」

「十雅…あの女は何だ」

「あ…の…女？」

十雅も知らないのか…？

「オレのクラス…1 - Aに転入してきた奴だ。獄寺と一緒に…」

「んー？獄寺と一緒に転入してくる奴なんていねーぞ？」

「だから聞いてんだろ…」

「あ、そっか」

「やっぱりコイツ馬鹿だな…」。

十雅はどこからか資料を取り出した。

「んー、やっぱりそんな奴はいねーな…。転生者かもしんねえと思っ  
たが…記録がない」

パラパラと資料を見ながら話す。

「記録？」

「ああ。転生させたら記録をつけるんだ。これも仕事だからな。」

ま、転生させるのは間違えて殺した時だけだからあんま使わないけど…。

南の前にも転生させた奴いるんだぜ？同じリボーンの世界にな

「へー…。いつ頃？」

「それは教えられない。ま、その内分かるさ」

その内……？

ま、いつか…。

「で、その女の名前は何ていうんだ？」

十雅は資料を閉じ、聞いてきた。



「えっと…名字は『山下』。名前は忘れた…つか知らね」

「『山下』、ね…。とりあえず調べてみる」

「おう、なるべく早くな」

南がそう言うと、十雅は何かを思い出したように「あ」と言った。

「何？」

「あのよ…前に小型ノートパソコン…言いにくいから『パソコン』  
でいいか。ともかくそれ送っただろ？」

あれに特殊能力つけんの忘れてて、今は単なるパソコンなんて  
ど…」

「…能力ってオマエが考えてつけるのか？」

「ん？まあそうだな…」

それを聞いて、南はあることを思いついた。

「んじゃ、オレが能力考える」

「あ、いいぜ……………ってダメ！！これはオレが考えるものなんだからよ！」

「男に二言は？」

「無い！！……………じゃなくてえええええ！！！！！！」

「よし、じゃあオレが考えるから。だから今はまだ何もつけないでおけよ。じゃーなー」

南は勝手に狭間から現実世界に戻り、そこには自分の発言を後悔する十雅のみが残された。

そして、今いるのは屋上

。

「オレを裏切るのか？リボン！！今までののは全部ウソだったのかよ！！？」

「ちがうぞ。戦えって言ってんだ」

「は！？」

南は獄寺と沢田の戦いを見るために屋上に来ていた。

なぜ南が戦いのことを知っていたか。

それは戦い後の獄寺の変化っぷりが面白かったから覚えていたのだ。

「あー早く死ぬ気になんないと死んじゃうぞー」

そう思っている間にも、獄寺から沢田への一方的な戦いが続く。

「<sup>リ・ボン</sup>復活！！！！死ぬ気で消火活動！！！！」

バカ、と音を出して沢田の死ぬ気タイムが始まる。

「そーいや死ぬ気見るの初めてだったな…」

南は屋上でボソッと呟いた。

「消す消す消す消す消す…」

沢田の手がダイナマイトの火を消していく。

獄寺は『二倍ボム』を放つが沢田はどんどん火を消す。

そして、『三倍ボム』を放とうとするが、未完成なために手から一つダイナマイトが落ちる。

こういう場合、一つ落ちるとバランスが崩れるのでダイナマイトはポロポロと落ちていく。

「(ジ・エンド・オブ・俺…)」

獄寺がそう思った途端…。

「消す!!!」

『消火活動』を目的として死ぬ気になった沢田は獄寺の周りに落ちたダイナマイトの火も消していく。

「……おー、すごいなー………それ以上にキモイけど。」

で、何でオマエがそこにいるんだ………？本来存在しないはずの、イレギュラーさんよお………」

南がそう呟いた。

南が大っ嫌いの、本来存在しない転校生

山下咲。

彼女が沢田やりポーン達と一緒にいたのだ。

ならば原作と少し変わって進むのではないか……？

そう思って南はかなりイラついていた。

しかし、原作通りに物語は進む。

獄寺が沢田に土下座する。

しかし、この後が変わった。

「ところで、10代目。この女は誰ですか？さっきから一緒にいますか……」

「……チツ。ここからあの女が関わるのかよ……獄寺、気づかなくてよかったのに……」

南の予想は、当たってしまった。

「あ、この子は山下咲ちゃん……です。今日獄寺君と一緒に転校してきましたんですけど……」



なぜか敬語になる沢田。

「山下、オマエは10代目の何だ！…さっきから馴れ馴れしく10代目の傍そばにいやがって！…」

「（ナイス獄寺あああああ！…！！…！！ウザいよな！超ナイス！！！！！！！！！！）」

南は心の中で獄寺を後押しした。

「えっと…ツナの友達…です。今日なっただばかりだけど…」

咲がビクビクしながら言う。

そして、それだけではない。

顔が真っ赤に染まっていた。

「アイツ、転生者っつーことは原作のことも知ってたよな…。な  
ら何で怯えてるんだか。」

「そんでもってあの顔は何だ。醜みにくい顔に拍車はくしゃが掛かってんぞ」

南は離れていてあまり分からないが、獄寺は咲にかなりの殺気を送  
っているのだ。

知っていても、まさか会ってすぐに殺気をぶつけられて怯えない人  
は一般人にはいないだろう。

そして咲は獄寺のことが好きなのだ。

教室でもチラチラ獄寺を見ていた。

「ケッ」

獄寺は咲の存在を自分の中から消した。

そして原作に戻って、不良達が来て、獄寺がダイナマイトでボロボロにした。

「あー、よかった。原作のことを覚えちゃいないが、アイツが獄寺から嫌われて。」

どっちかつーとラッキーだったからいや」

少し上機嫌になった南はiPod touchで曲を聴きながら家へと帰った。

Episode 9 教師をハメる！

昨日、明日は理科のテストの返却があると聞いた。

つまり、根津をハメる日だ！

そして…。

今日は、学ランも腕章も付けてないんだぜ！！

…でも、今日はなんだよな…。

今日からじゃないんだよな…。

なんで付けてないのかって？

フッフッフ…。

これこそがあの忌まわしき根津をハメる方法だ！

だから昨日頑張って雲雀から許可を得たんだよ…。

アイツ、人の言ってることムシしやがるから大変だったんだぜ？

昨日にさかのぼってみよう

。

「なあ、明日だけでもいいから一般の生徒と同じ制服で来て「ダメ」

…聞きました!?

この即答っぷり!!!!!!

「なんでそんなに即答なんだよ!?!」

「君は風紀委員でしょ。なら当然だよ」

「だーかーらー、一日だけ!!明日だけでいいから!?!?!」

頼むよ、極悪非道の風紀委員長雲雀様」

「咬み殺してあげようか？」

死にたくはないけど、明日の普通の制服はなんとしてももぎ取る！  
！！！！

「あ、それは丁重にお断り。ホントに頼むって！！」

「……」(ムシ)

「はあああああああ！！！！？？！！？？！！

ここにきてムシとかなんだよ！！！！」

「……」(ムシ)

「……ちょっと酷くね？」

「……」(ムシ)

「そーかよ！…ムシかよ！…ならオレはここで頼み続けるだけだ！  
！！

なあ！…明日…」



と、二・三時間続き雲雀が折れたのだ。

……オマケに大量の書類（今日来る分だけらしいから大量かは分からないけど、きっと大量）も。

よし、逃げよ

今思ったけどオレって、一回も風紀委員の仕事してないなー（逃走するから）。

肩書きだけでいって。

風紀委員とか、『風紀』って掲げただけの不良の集団なだけなんだよな〜。

原作では一部しかその様子が書かれてなかったから違うと思うだろうけどな。

おっと、これを雲雀に言うってことは喧嘩売ると同じことだから言わねえけど。

ま、そーゆーワケで今日のオレは風紀委員と知らないヤツは一般生徒だと思っだろう。

根津とか根津とか根津とか。

あー、根津の驚いた顔が目には浮かぶぜ

楽しみだな

そして、理科の時間

。

「今日は理科のテストを返却する。呼ばれたヤツは取りに来い。」

まず、青山―」

そして、名前順で呼んでいく。

オレは風間だから、沢田より前か―。

「大久保―」

「はい」

「風間―」

「……」

「風間！早く取りに來い！！」

ムシしてる訳ではありません。

爆睡中です。

周りの生徒（風紀委員と知っている生徒）は

「根津のヤツ、風間さんの機嫌を悪くさせんなよ！」

「根津…さようなら」

…とまあ、オレが根津をボコると思っているようだ。

オレとしてはまだ考え中だな。

「風間あー！！起きんかー！！」

そう言いながら根津は教科書を丸めたもので殴ろうとする。

オレは爆睡中だったが、気配を感じて起きた。

ヒュッ。

パシッ。

なにが起きたかと言うと、根津が思いっきり殴ろうとしてきた（ヒュッ）。

そこでオレの右手だけが動いてそれを止めた（パシッ）。

んまあ、こんな感じ？

「貴様っ！！」

「ウルセエ。黙りな」

根津のやつ、どんどん顔が真っ赤になってくぞぞ？

あー、楽しい

「生徒ごときが生意気なんだ！！」

…そうだ、オマエのテストの点数を皆の前で言いふらしてやるづ。

えーっと…100点だ！！

たかが100で…なにいい！！！！？？？？！ま、満点？？！？  
？！！！」

「まあ、簡単過ぎて一瞬で終わったしー？

オレを誰だと思ってるの？」

「ぐっ…まあいい。そうだ、ここで仮定を話してやる。

理科のテストで満点を取りながらも返却時は寝てるやつがいると  
しよっ。





ああ、オレが根津の学歴を知ってるのは調べたからだ。

転入二日目で根津と会った時にかなりムカついたからさ

後はこっそり雲雀にバレないように調べたんだ！

雲雀にバレたら根津をハメられないじゃん？

あ！そうだ！！こいつムカつくから退職させよ

そんな真っ黒いことを考えている内に話は進んでいき、沢田が呼ばれ、仮定をし、獄寺が来て…。

今は校長室。

校長はオレが風紀委員と知っている。

「根津君、まずは風間さんを帰らしていいかね？」

「校長！！いけません！！風間が一番悪い生徒なんです！！」

「ききききき君は雲雀君を敵に回したいのか！？」

「何を言ってるんですか校長。そんなのは嫌に決まっていますでし  
よ」

「風間さんは風紀委員だ……!!」

「……!!???!?!?!」

あービビってる、ビビってる

「はー…そういえば1-Aに風紀委員がいるとか…」。

風間さん……!!ゆゆゆゆゆ許してください……!!」

お　　、見事なド・ゲ・ザ

でもな、オレってばさっきのがかなり頭にきてんだ

「しょうがないですね」。

実は根津が五流大卒で、40年前に並中に通ってたってことを教

えるだけでカンベンしてやるよ」

「!?!? 風間さん! それは本当のことなんですか!?!?」

おっ、いーねーいーねー

校長が食いついてきた。

「まー後は本人に聞いてくださいーい。

「そんじゃ」

オレは校長室を出て行った。

後から聞いたことだが、あの後は根津が退職することになり、沢田と獄寺も何事もなく助かったそうだ。

そんでもって、オレは見事に書類からの逃走を成功させました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6945y/>

---

家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る！～改～

2011年11月27日23時55分発行